やはり彼の後輩との接し方はまちがっている

暁英琉

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

この間息抜きに書いた短編物。

時間的には小町が総武高に入学してきた後の話。

八幡はあいかわらずぼっちで友達もいなければ彼女もいない。

けど、（妹も含む）歳下には弱いのよね。お兄ちゃんってちょろい。

目次

奉仕部にて　1
職員室にて　11

奉仕部にて

「うっす」

放課後、いつも通り奉仕部に向かう。毎日変わらない生活をすることで毎日働く社畜精神を養っていると考えると学校教育怖いと思う。

「あ、お兄ちゃん！」

最愛の妹、小町が駆け寄ってくる。四月になって総武高校に入学した小町はすぐに奉仕部に入部した。これまでも何度か関わっているので、平塚先生も二つ返事で入部を許可したようだ。

「おう小町、今日は変な虫寄りつかなかったか？」

「もう、お兄ちゃんは心配性だなー。そんなに心配しなくても小町は誰とも付き合う気ないよー」

談笑しながらいつもの席に着いて読書用の本を取りだす。小町も定位置について俺の手元にある本を覗き込んできた。

「あ、それ小町が貸した少女漫画！　どう？　どう？　感想言ってみそ？」

「まだそんなに読んでねえぞ？　まあ、かなり突拍子もない設定だけど結構引きこまれ

るよな。お嬢様高校の金持ちお嬢様がお笑い芸人にスカウトされるとかスカウトの精神疑うわ。単純にネタも面白いし。小町から借りなかったら絶対ゲテモノだと思って読まなかったけど」

「予想以上に感想言ってくれた。嵌まってますなーお兄ちゃん、うりうり」

「頬を突いてくるな、恥ずかしい。まあ、実際面白いし、小町が推してくれるってことは十中八九はずれなしだからな」

小町は小説はあまり読まない代わりに少女漫画はかなりの量を所持している。俺もときどき借りて読むが、小町自身が勧めてくる作品は小町的お気に入りであり、俺も気に入る作品なのである。つまり迷ったら小町に聞けば安牌。

「こんにちは～」

本の内容をネタに話していると、我らが生徒会長、一色いろはがやってきた。もはやノックをする気もない。まあ、いつものことだから別にいいけど。

「おう一色、どうした？　仕事以外なら聞くぞ？」

「仕事の時も聞いてほしいんですけど……まあ、今日は生徒会も休みですから、遊びに来ただけですよ～」

「あれ？　けど、いろはさんってサッカー部のマネージャーじゃなかったですっけ？生徒会休みならサッカー部には行かないんですか？」

そういえば、こいつ生徒会がある時は俺を呼びに来て、生徒会がない時はここに遊びに来ている。「一年生（すでに二年）生徒会長なのに部活にも出て頑張ってる私」作戦はどこへ行ってしまったのか。

「あ～、サッカー部も今年になってまたマネージャー増えたんで、正直私がいなくても十分なんですよね～。力仕事は戸部先輩を頼ればいいよ～って一年には教えておきましたし」

戸部が哀れすぎて涙が出てくる。まあ、戸部とかどうでもいいから涙も出ないけど。

なんかドヤ顔で力説していた一色は俺の手元の本を確認すると目を輝かせながら定位置に付く。

「せんぱい！　それ今人気の奴ですよね！　ハッ、せんぱいまさか男の子なのに少女漫画読んでるオトメンアピールですか？　あの人は基本スペックが葉山先輩並みな上に乙女要素があるから許されるだけで、せんぱいだとキモいだけなのでもう少し慣れさせてくださいごめんなさい」

「俺これで何連敗なのかわかんねえな。もうそろそろガチ泣きしそう。あと、オトメンとか久しぶりに聞いたわ」

「今一気読みしてるんで～。けど、私これ読んだことないんですよね～。せんぱい、最初から読みましょうよ～」

え、なんで？　なぜこいつのために途中まで読んでいる本を最初から読む必要があるのか。一色はすごろくの〝ふりだしに戻る〟の可能性が微粒子レベルで存在している？　移動する〝ふりだしに戻る〟とか怖すぎるわ。

「いいじゃんお兄ちゃん！　面白い本の布教は義務だよ！」

「いや、それなら俺が読み終わってから貸せば……」

「私は！　せんぱいと一緒に読みたいんです！」

なにこいつあざとかわいい。ぷくーと頬を膨らませていたので指で押してやる。ぷふぅっとタコ口から息が漏れる。何これフルーティな香り。一色の吐息を芳香剤とかにして売ったら売れるのでは。やだ、八幡天才！

「お兄ちゃんお兄ちゃん！」

小町に呼ばれて振り向くと小町もぷくっと頬を膨らませていた。大丈夫、お兄ちゃんちゃんと小町がやってほしいこと分かるよ。小町には親指と中指で両頬を挟みこむように付いてやる。ぷぷぅとわざとらしい音を出しながらこちらもタコ口から息を漏らす。こっちはフローラルだぞ。この吐息お兄ちゃんがいい値で買っちゃう。

「はぁ、しょうがねえなぁ」

女の子の吐息の神秘を垣間見たことで俺の心が浄化されてしまった。一色の言い分を聞いてしまい、しおり代わりに挟んでいた指を外し、最初のページに戻る。

「へ～、結構アクティブな感じの漫画ですね～。こう躍動感があるって言うか……あ、せんぱいめくるの早すぎです」
「え、まだ読んでなかったの？　感想言ってたから読んだと思ったわ」
「私は読みながら感想言うタイプなんです～」
　それにしても読む速度遅いぞいろはす。お前本読まなそうだけど、漫画もあんまり読んでないんじゃないか？
「まあ、最近だとドラマとか見て原作の漫画読んだりはあんまりしないですね～。少女漫画読んでても男との話には使えませんし」
「後半黒いぞ一色。まあ、確かに少女漫画読む男子は少ないわなー。花とゆめとか結構面白い漫画多いのに」
「お兄ちゃん、そこはちゃおとかさ……」
「本ＳＳは白泉社を応援してい――」
「わあああああ、せんぱいストオオオオップ！」
　まあ、冗談は置いといて、複数人で漫画を読むときはどのタイミングでページをめくればいいんだ？　複数人で読むことがないからわからんちんだわ。
「じゃあ、私が読み終わったら先輩に合図出します！」
「じゃあ、小町も！」

「お、おう。お前らがそれでいいならそうするか」

そして改めて漫画に目を落とす。日頃の読書で培われた速読で文字を含めて一度大まかに読んで、もう一度今度は絵を中心に見ていく。驚くと劇画タッチになるの斬新だな、ほんとにこの作者女性かよ。そんなことを考えながら見開きのページを読み終わるころ――。

――――ｃｈｕ

両頬に柔らかいものが触れる。どうやら一色と小町がほっぺチューをしてきたらしい。俺がほっぺチューとか言うとくっそキモい。ヒッキーキモい。

「それが合図か」

「えへへ、そうだよー！」

「ふふっ、せんぱい的にポイント高いですか？」

「はいはい高い高い。あとあざとい」

リアクション薄い！　と両側から文句を言われるが無視無視。というか、本当のことを言えば不意打ち過ぎて反応できなかったというだけなのだが、事前に一言あったら避けてただろうし結局リアクションは薄くなるか。やべ、今頃になって恥ずかしくなってきた。

その後はひたすらキス→ページをめくるの繰り返しであまり内容を把握する余裕が

なかった。帰ったら読みなおそう。

……

……

「……お、もうこんな時間か。そろそろ帰るか」

「そうだねー、帰りに買い物して帰ろうよ！」

「あ、今日はタケノコご飯とかどうですか？　春になってからまだタケノコ食べてませんし！」

「タケノコご飯に魚の塩焼き……じゅるり」

「小町、よだれよだれ」

「ハッ、これは失敬」

夕飯の献立を話し合いながら荷物をまとめる。バックを肩にかけると、右腕に一色、左腕に小町が抱きついてくる。歩きづらいことこの上ないが文句を言うと後が怖い。俺の立場弱すぎ！

「じゃあ、先帰るな。雪ノ下、由比ヶ浜」

「雪乃さん、結衣さん、さよならですー」

「先輩方、また明日です～」

今日も静かな雪ノ下と由比ヶ浜に別れを告げて部室を出た。最近あいつらやけに静かなんだよな。最初は生理かと思ったが、こんなに生理がこんなに長くはないことは俺にもわかる。一体どうしたんだろうな、俺にはあんま関係ないけど。

「そういえば、今日卵の特売じゃなかったか？」

「あっ、そうだ！　卵切らしてるし買い足さないと！」

「おひとり様一パックだから三パックゲットですよ！」

「いや、三パックは絶対余るじゃん。賞味期限前に卵祭とかもう絶対やりたくないわ。二パックで十分」

オムライスと卵焼きとカルボナーラと卵スープで卵が被ってしまったとか軽く絶望覚えたぞ。一色と小町の料理うまいから食べたけど。

＊　＊　＊

彼らがいなくなった部室は途端に静かになった。あまりにも静かすぎて自分自身すらいないのでないかと錯覚してしまいそうなくらい。

「……」

「……」

「……ねえゆきのん」
「なにかしら由比ヶ浜さん」
沈黙に耐えられなくなったのか由比ヶ浜さんが声を発する。部室に入ってくる時に挨拶して以来の声は重く沈んでいる。私もいつも通り返そうとしたけれど、自分でもわかるくらい低い声が出た。
「この状況……いつまで続くのかな？」
「恐らく……ずっと……」
由比ヶ浜さんが机に沈んだ。あんなものを毎日見せられた上に、これからも見せられると言われれば無理もない。
左ひざに小町さん、右ひざに一色さんを乗せてページをめくる度にほっぺたにキスをされる比企谷君を見せられたら、私だって狂ってしまいそうになる。最初は少しずつ席を比企谷君に近づけていただけだったのに、気がついたらひざに陣取っていた。小町さんは……百歩譲って気にしないにしても、一色さんまで彼のひざを定位置にするなんて誰が予想しただろうか。そして今日はページをめくるたびにキス、最近の高校生はそんな気軽に口ではないとはいえキスをするものなのかしら。こんなとき友達の少ない私は完全に否定できないのがちょっと歯がゆい。
しかも問題なのは彼らが別にいちゃついている自覚がないということだ。彼らは至

極普通に過ごしているつもりなようで普通の表情で乳繰り合うものだからこちらとしてもツッコむ隙がない。というか一色さん、さっきの言い方だと比企谷君達と一緒にご飯食べるのかしら……。

心なしか、心休まる場所だったはずの奉仕部部室が私と由比ヶ浜さんにとって修練の場になりつつあるような気がする。一切しゃべりに参加できず、時間の経過だけをひたすら待つと言うのは無言を好む私でも少し辛い。由比ヶ浜さんはもっと辛いでしょう。

けど、私にはこの現状を打開する策がない。というか私には彼ら三人が作り出すいちゃいちゃ空間に割って入ろうという勇気がないの。由比ヶ浜さん、無力な私を許して。

「ゆきのん……」

今、私たちにできることは――

「今日、部屋に行ってもいい？」

「……えぇ」

――傷を舐め合うことだけだった。

やはり彼の後輩との接し方はまちがっている。

職員室にて

現在俺は放課後の職員室に来ていた。目の前には青筋を立てた平塚先生と一枚のプリント。

「比企谷……これがなんのプリントかわかるよな？」

「俺の視力が落ちていなければ、現国の俺の宿題に見えますね」

「そうだ、よかったな比企谷……お前の視力は落ちていないようだぞ？　しかしだな……」

わなわなと先生の肩が震える。先生、そんなに怒り肩にしているとただでさえ少ない女性らしさが……なんでもありません。

「どうしてこの本の感想で脇役も脇役の先輩力士にスポットを当てて、最終的に性悪説の提唱に至るんだ！」

これは現国の課題の感想レポートだ。本の内容は幕下力士が上にのし上がろうとする奮闘記で、俺はその中で主人公を蹴落とそうとする先輩力士にスポットを当てたのだ。出てきたの本全体の三パーセントくらいの脇役だけど。

「たしかに脇役ですが、他がきれいすぎる分一番人間臭いじゃないですか、醜くて」

「はあ、奉仕部に入って一年。少しは変わったと思ったんだがな……」
　人間本質はそうそう変わるもんじゃない。その証拠に先生だって結婚でき……なにも言ってないですから睨まないでください超怖いです。
「とにかく、課題は再提出だ。わか……」
「あれ～？　せんぱいなにやってるんですか～？」
「お兄ちゃんまた呼び出し？」
　先生の声を遮るように後ろから二つの声が浴びせられる。振り返る前に右腕を小町に、左腕を一色に取られた。まあ、いつものことだから特に気にしないんだが、軽いとはいえ同時に抱きつかれるとさすがに衝撃が大きいのであんまりやらないでいただきたい。
「小町、またってなんだまたって。お兄ちゃん最近はあんま呼び出しくらわないんだぞ？」
「基本呼び出される方が稀なはずなんですけどね……」
「ほんとゴミいちゃん……」
「はいはい分かった分かった。ていうか、お前らはなにしに来たんだ？」
　職員室にこいつらが来ることはだいぶ珍しいはずなのだが。
「私は生徒会の方で受け持ってた先生からの仕事が終わったんでその報告です」

「小町はクラスのプリントを持ってきたんだよ！」
「あー、小町はクラス委員だもんな。えらいぞー」
小町の頭をわしゃわしゃと撫でる。妹の頑張りをちゃんと評価する兄、八幡的にポイント高い。俺の手の下で小町は気持ちよさそうに目を細めていた。
「ふふふー、素直に褒めてくれるお兄ちゃん、小町的にポイント高いよー」
お互いのポイントが上がった。さすが兄妹の愛は格が違った。
「せんぱ～い、小町ちゃんだけ褒めてずるいです～。今回先輩に頼らずに頑張ったんですから～」
「いや、それが本来普通なはずなんだが……。まあ、頑張ったのは事実だからな、よくやったぞ」
もう片方の手で一色の頭もわしゃわしゃと撫でてやると、一色も目を細める。目を細めるのはいいけど、頬を赤くするのやめて、かわいいから。
「せんぱいに褒められるなら頑張ったかいがありましたね～」
「よし、その調子で俺なしでも仕事ができるようになろう」
「それはないですよ～。だって、せんぱいなしだと私なんもできないんですから～」
俺なしでなんもできないとかダメな子すぎるだろ。なに？　俺ってば人をダメにするの？　人をダメにする八幡なの？　うっわ八幡さいてー。

「小町もお兄ちゃんなしだとなにもできないから、もっと頼らせてねー」
「いや、お前俺以上にいろいろできるだろ」
　友達作ったり、料理も俺以上にできるし。勉強は……教えなきゃやばそうだけど。
「料理はお兄ちゃんが食べてくれないなら作る気になれないし、お兄ちゃんなしじゃ小町は夜も寝れないのですよ……ぐすん」
「ぐすんとか声に出して言うもんじゃありません。一色みたいになるから」
「な、酷いですよせんぱい！　私ぐすんとか言いませんよ……ぐすん」
　言ってる。一色ちゃん言ってるから。否定して一秒で言ってるから。本当にあざとい。
「むぅ～、いろはちゃんは傷つきました。私だってせんぱいが食べてくれないなら料理作る気になれないしせんぱいと一緒じゃないと安眠できないのに！」
「いや、お前らの料理おいしいし、作ってくれるのはありがたんだけどな」
　実際二人の料理の腕前は相当なもんで、毎食楽しみなのだ。食事が楽しみだから間食もしないしマジ健康的。まあ、時々お互い競い合っちゃって食堂でも経営するのかってくらい作りすぎちゃうけど。比企谷家の食費が作りすぎでマッハ、親父の目がどんどん死んでいく……親父だからどうでもいいや。
　あと、安眠できるからって夜中に布団に潜り込んでくるのはやめていただきたい。あ

れやられると目が覚めちゃうんですよ。やるなら寝るときに最初から入ってきて。
「おいしい？　へへへ～、今日は豪華にしなきゃいけないですね～」
「おいしいって素直に褒めてくれるお兄ちゃん、小町的にポイントカンストだよー、にしし」
　二人してにやけながら抱きついてくる。手はまだお互いの頭の上に置いたままなので、必然的に両の脇腹に抱きつかれる形だ。両側から四つの柔らかい巨大マシュマロを押し当てられている気がするけど、まったくの気のせいだ。気にしてはいけない。しかし、二人とも最近また大きくなってませんかね？　沈み方というかひしゃげ方というか……全力で気にしちゃってるじゃないですかやだー。
「おにーちゃん！」
「せ～んぱい！」
「……なんだ？」
　上目遣いで見上げるのやめて。超かわい……あざといから俺には通用しないぞ。いや、通用しないからといってやっていいことにはならないわけでしてね？
「「すきー」」
「はいはい俺も好きだよ」
「「うわ、適当だなぁ」」

なんか君たち最近ハモること多くありません？　なに？　まなかな？　お願いだから怒る時にハモるのやめてね。相乗効果でダメージ五倍くらいになるから。

そもそも最近一日十回くらい「好き」って言われてるから「好き」がゲシュタルト崩壊起こしてんだよ。適当になるのも当然であるといえる。

「せんぱい朝はあんなに素直なのにな～」

「お兄ちゃん朝弱くて反応かわいいですよね」

「「ねー」」

いや、朝起こしてくれるのはありがたいんだけどさ、悪戯してくるのはやめていただきたい。八幡自慢のスペック高い脳みそ君も寝ぼけた状態だと全然働いてくれないんだから。

「それにしても、せんぱいに心をこめて告白したのに適当にあしらわれて、私の乙女的ガラスハートはとても傷つきました」

いや、お前のハートはどう考えてもオリハルコンに毛がはえたくらいの頑丈さだと思うんだが。

「小町も勇気を出して実の兄妹の垣根を越えた告白をしたのに、それをあんなおざなりに返すなんてポイント低いよお兄ちゃん……」

勇気も何もさっきの告白は今日もう七回目だからね？　勇気出しまくりでしょ。ア

ンパンマンと友達になれるまである。あと、二人して示し合わせたかのようにヨヨヨって泣き崩れるのやめて！　シンクロ率高いよ。姉妹かよ！

「と、いうことでー」

いや、これ本当は台本とかあるんじゃないの？　ひょっとして先生に呼び出されたのまでグルの可能性まであるわ。

「せんぱいにはこの後私たちにケーキを奢ってもらいま～す！」

「駅前においしいケーキ屋見つけたんだよー」

あぁ、絶対これ台本あるわ。こいつら最初から俺に奢らせるのが目的だったな。別に三人でケーキ食べに行くのに異論はないけどさ。

「てか、駅前のケーキ屋ってこないだ行ったとこじゃないのか？」

先週行ったとこのガトーショコラおいしかったな。あの味はリピート性高い。

「今日は別のとこだよ」

「今カップル限定メニューがあるみたいんなんですよ～」

限定。それは日本人の心を甘くくすぐる甘美な響きだ。〝限定〟と付くだけでB級グルメと高級レストランくらい違うように感じてしまうから性質が悪い。まあ、俺も好きだよ。会場限定グッズとか。

つまりその限定メニューのためにカップルの振りをしろということだな。

「けど、三人で行ったらカップル認定されないだろ。二回に分けて行くとかやだよ？」
　一回目はともかく二回目は店員の白い目を浴びせられることは想像に難くない。店員さん、営業スマイル崩さないで！
「そんなの、三人でカップルです！　って押し切ればいいじゃないですか！」
「なんという横暴。カップルの定義が崩れるぞそれ」
　カップルって一対とかそういう意味なんですけどね……。
「なるようになるって！　ならなかったらお兄ちゃんが店員さんの白い目に耐えて二回行けばいいから！」
「だからその目に耐えたくないんだよ……」
　もうやだ、後輩たちが、後輩と妹が俺を社会的に殺そうとしてくる。俺の社会的地位もうすでに火サスラストでおなじみの断崖絶壁なのに。船越さん！　俺を突き落とそうとしないで！　ゴチ復帰まだですか？
「まあ、そうなったら夜に小町のおいしい料理で癒してあげるから！　あ、今の小町的にポイント高い！」
「私の料理でも癒してあげますよ～。あ、今のいろは的にポイント高い！」
「大前提として俺を貶めてる時点で八幡的にポイント低い……」
　まあ、いいけどさー。ふと時計を見ると結構時間が経ってしまっている。この時間だ

ともう奉仕部は終わってしまっているだろう。ケーキ屋も何時までかわからないが、行くなら早いに越したことはない。

「はあ、じゃあ行くか。あ、先生課題用プリントを……先生？」

平塚先生に視線を向けると、この世のものじゃないものを見るような視線を向けてくる。あの、目は腐ってるけど俺ばっちりこの世界の住人なんですけど……。

「け……」

「け？」

「結婚したあああああああい!!　うわあああああああん!!」

急にぶわっと泣き出したと思うと新しいプリントを叩きつけて走り去っていってしまった。アラサーって突然泣き出すほど追いつめられているのだろうか……誰かほんともらってあげて！

「なんだったんでしょ？」

「わからん……」

「まあ、平塚先生だしねー。さ、お兄ちゃんもいろはさんも早くいこ！」

「そうだね～」

「おい、あんま引っ張るなって！　こけちゃうだろ！」

ちなみにケーキ屋では三人で一緒にカップル限定メニューを食べることができたけ

ど、結局店員さんは白い目をしていた。結局逃げ場なしだった。おいしかったからいいけど、あんまよくない。